

# 真 機動戦士ガンダム Hope

彗星大佐

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので  
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を  
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

長きに渡る戦争は終結し、世界は平和に包まれていた。

しかし平和とは一時の夢。長くは続かない。

宇宙統制軍に敵対する宇宙革命軍が発足され、世界はまた戦争の歴史を紡ぎはじめ  
た。

戦争が始まり2年。

突如独立機動組織を名乗る組織が現れる。

その組織は【どの軍にも属さず、世界の戦争に介入し、両軍を戦闘不能にする事により戦争を終わらせる。】

と宣言。

世界の戦争に怯える人々に淡い希望を持たせた。

この物語は戦争と言う名の【絶望】に【希望】で立ち向かう少女の物語。

少女は世界に希望を灯す事が出来るか……。

※この作品は【機動戦士ガンダムHope】のリメイク作品です。

前作より大幅に設定、本編を変更しています。

そう言うのはダメだと言う人はブラウザバックをお勧めします。

目

次

『第1話』

蒼い流星

『第2話』

独立機動組織

『第3話』

D S P

『第4話』

ダリス隊

『第5話』

再会の姉弟

『第6話』

叫び

27 21 16 10 5 1

# 『第1話』 蒼い流星

その日。地球、コロニー間の長きに渡る戦争が終結した。  
世界は平和に包まれていた。

しかし平和とは一時の夢である。故に長くは続かない。

宇宙統制軍に敵対する宇宙革命軍が発足され、世界はまた戦争の歴史を紡ぎはじめた。

戦争が始まり2年。

突如独立機動組織を名乗る組織が現れる。

その組織は【どの軍にも属さず、世界の戦争に介入し、両軍を戦闘不能にする事により戦争を終わらせる。】  
と宣言。

世界の戦争に怯える人々に淡い希望を持たせた。

その日ある男は宇宙に蒼い流星を見る。

狭苦しいコツクピットにけたたましいアラート音が鳴り響く。

そのコツクピットが内蔵されているモノはMS<sup>モビルスーツ</sup>。

そのMSは従来のモノとは違い額にV字アンテナが付き、その背中にははつきりとした形の蒼白の翼が付いている。

まるで見る者すべてを魅了するようなそのMSがいきなり背後からの衝撃に揺れる。

「くう……んな…」

コツクピットの少女はその衝撃に顔を顰めながら攻撃してきたMSを見つける。

その翼を持つ美しいMSは今宇宙革命軍の【フェンリル】に襲われていた。

そのフェンリルがたまたま周辺の偵察をしていた所に、美しい、謎の蒼白のMSが現れたのであつた。

フェンリルは蒼白のアンノウンMSに向けてビームライフルを3回放つ。

ライフルの銃口から放たれた真っ赤なビームが蒼白のMSへ向けて飛んでいく。

そのうち2発は蒼白のMSが下手に動かなければかすりもしないが、最後の1発が直撃コースだつた。

先程当たつたのはハンドグレネードだつたため、まだ良かつたがビームには装甲が勝てない。

まさに万事休す。

「嫌……！」

『セシル！ 体、借りる！』

誰かが叫ぶと少女：セシルの体から1度力無く頭を下ろす。

しかしその後顔を上げると先程まで綺麗な真っ赤だつた瞳が蒼く輝いていた。

先程まで真っ直ぐに飛ばすことすらおぼつかなかつた少女が、直ぐ後ろまで迫つたビームを機体を回転させ、軽く避けて見せた。

そして避けた後回転しながら上昇し、

「ごめんなさい 少し：邪魔よ」

そう言い放つと蒼白のMSは体と銃口をフエンリルに向ける。

「くそつ！ なんだよこのMSはあ！」

フエンリルのコックピットでパイロットが毒つく。

「さよなら 名も知らぬパイロット」

そう、冷たく言い放つと蒼白のMSはライフルを発射。

そのフェンリルを蒼白のMSのライフルの銃口から発射された蒼白いビームが貫き、爆散した。

「ハア…ハア… 終わつ…たよ…セシ…」

そしてその少女も眠るかのようにコツクピットにて意識を失つた。

## 『第2話』 独立機動組織

その日ある女はこの世界の希望と出会いう。

漆黒の宇宙に漂う蒼白のモビルスースM Sを発見したのはつい先程の事だつた。

独立機動組織 アイアス。

今、戦いの溢れるこの宇宙の中で全人類の希望を一心に背負つた組織である。その組織は今日も周辺偵察を行つていた。

「ふう・： 1日くらい戦争の無い宙域にめぐり合えてもいいのにねえ・：」

そう憂鬱そうに言う1人の女性の姿があつた。

その女性の名前はシエル・アトライア。

独立機動組織アイアスの〈ガラハツド〉艦長である。

「そんな事言つたつて両軍のお偉いさん達はこの世界を我がものにしようと必死ですか  
らねえ」

シエルの呟きにそう返すのは1人の男。

ガラハッドに収容されているMS「トール」のパイロットであるクレア・リヒトである。

「そんなの言われなくても分かつてるわよ……私の小さな望みよ 望み  
そんな彼女等の他愛の無い話は艦内に響くアラート音で終了した。

「付近にて戦闘発生！ 戦闘を行つているMSの数は……2？」

「あら 今回は随分と楽な戦闘を見つけたものねえ」

ガラハッドの戦況オペレーターであるレイ・ルディスの報告にシエルは、軽い口調で返事を返す。

「MS隊発進用意 今回はペルセウスとアルテミスだけでいいと伝えて」

相手が2機のみという状況から3機全て出さなくとも構わないと結論を出したシエルはそう指示を出した。

「了解……あれ？ 戦闘が終了したみたいですね……」

「あら？ 随分速いわね」

シエルがそう思うのも無理はない。

実際、戦闘を発見してからここまで3分もたっていない。

「ですがアンノウンのMSが動いていません……」

「……どうゆう事？」

「わかりませんが 热源の反応は消えてません」

「……確かにそれはアンノウンだったわね?」

「はい そうです 機体認証に該当しません」

「そう ではそのMSを鹵獲します ペルセウスを発進させて」「り、了解です ク里斯さん発進よろしくお願ひします 目的はアンノウンMSの鹵獲です」

レイが伝えるとペルセウスパイロットのクリス・リヒトは頷きペルセウスを駆つてアンノウンを収容した。

《… しる! … シル! セシル!》

セシルと呼ばれた少女は誰かに呼ばれる声で目を覚ます。

「… はつ! こ、ここは?」

《ここはホープのコックピットの中よ》

「そ、そつかあ よかつたあ」

《でも… きっと何処かの軍に鹵獲されたわね…》

「ええ!? ど、ど、ど、どうしよう!?」

《落ち着きなさい 取り敢えず 今は変に抵抗しない方がいいわ》

「う、うん わかつたよ…」

セシルが返事をしたそのタイミングで外から女性の声が聞こえてきた。

『そのアンノウンMSのパイロットは直ぐにコツクピットのロツクをハズして出て来なさい』

「ど、どうする？ セシリ亞ちゃん…」

『シカトよ シカト 取り敢えず黙つときなさい』

「う、うん」

『早くしなさい これで警告は最後よ さもなければあなたを撃破します』

『え、ええ!? ビーするの!? セシリ亞ちゃん!』

セシリ亞は小さく舌打ちをすると、

『セシル… 体借りるね』

そう言つて魂を入れ替えた。

「相手の事を知りたければ自分の事を先に言うのが礼儀つてもんじやない?」

艦内にセシリ亞の声が響く。

その声が女性のものであつた事にアイアスのクルーは驚きを隠せずにいる。

『… そうね 失礼したわ 私は独立機動組織アイアスのガラハッド艦長 シエル・アライアよ』

「アイアス… ふうまためんどくさいところに鹵獲されたものね… 私も運が無いわ」  
やれやれと言わんばかりの声にシエルも苦笑いを返す。

『取り敢えずコックピットのロツクだけでもハズしてくれないかしら 貴女の事が知りたいわ もちろんこの艦のメンバーの誰にもそのMSには近づかせないわ』

「そう… もし破つたら私の全力をもつて貴女達を殺すわ」

声色からわかるようにまだ幼いと言える少女の口から遠慮なくはき出された「殺す」と言う言葉にクルーはまたも驚きを隠せなかつた。

そして程なくアンノウンMSのコックピットからパイロットスーツを着ていない少女が現れた。

## 『第3話』DSP

その日、人々はこの世界に溢れる小さな絶望の1つを知る。

警告をしたアンノウンMSから降りてきた少女ははるか昔、人類全てがまだ地球にいた頃の高校の制服のようなものを着ていた。

「どうも。私はセシリア。そして…」

さつきまで話していた少女の首から力が抜ける。

そして、頭をあげた時少女の綺麗な青い瞳は赤い瞳に変わっていた。

「そして私はセシル・ヴァイスと言います。よろしくお願ひしますね！」

「にっこり」というような表情で告げた少女の喋り方は先ほどより明るくなっていた。

「……えっと… 改めて、ガラハッド艦長 シエル・アトライアよ」

「テンションの変わりようにガラハッドクルー全員が困惑している中、シエルは若干困りながらも冷静に対応した。

「助けて頂いた恩もありますのでできる限り質問には答えますね!」

「え、ええ。ありがとう」

ガラハッドの中にあるとある1室に、「ペルセウス」、「アルテミス」を模した制服を着用しているガラハッドクルー全員と、所謂女子高生の様な格好をした少女が席についている。

「それでは色々と聞かせてもらうわね。まず貴女は何処の部隊所属かしら?」

「私達は何処の軍でも、部隊でもありません」

「そう…ではあのMSはなんでしょうか？ 型式番号は？」

「け、型式番号？」

「型式番号」と言う単語を聞いた途端に目の前の少女は慌て始める。

「せ、セシリ亞ちゃん…」

『まつたく…しょーがないわね。体借りるわよ』

「ふう。えっとまずあのMSの名前は【ホープ】 型式番号は【unkown—001】

「【unkown—001】…それにしても名前が【希望】とは製作者も大きくてたものね…それでそのMSは何処で入手したの？」

「ホープは私達が脱走する時にそこにあつたから乗ってきたのよ」

「… 脱走？」

ガラハツドクルーのクレアが聞く。

「ええ 脱走 革命軍の研究所よ」

「どういうこと？ 詳しく説明して」

シエルが聞くと明らかに嫌そうな顔をし、波々話し始める。

「貴女達は昔の革命軍の計画… 知つてるかしら？」

「計画？」

「ええ [D S P]… と言えば分かるかしら？」

その言葉を聞いた途端その部屋の中に衝撃が走る。

【D S P】（ダブル・ソウル・プロジェクト）。

開戦当時宇宙革命軍が計画した強化パイロットの作製計画である。

ある1人の人物に魂をもう一つ植え付け、戦況把握、空間認識能力などを底上げしたパイロットを作り出す。

という目的を掲げ、多くの民間人、特に子供を集めて実行された。しかし、もう一つの魂に対し協力な拒否反応が起こり、成功は0。失敗した人々は死に至つてしまつた。

「私達はその計画の唯一の成功例よ。私達はその計画の後、別の研究所に移され体を隅々まで調べられたわ。それでたまたまチャンスがあつたからホープと一緒に逃げ出して来たつて訳」

「そんな事が……そ、r 「同情の言葉なんていらないっ！」ツ！…」

シエルが気を遣い、言葉を発しようとした時セシリアは強い「否定」の意思を発した。

「貴女達なんかに私達の辛さを理解してもらおうなんて思つてない。中途半端な理解で全てわかつた様な言葉は発さないで！」

セシリアはガラハッドクルー全員を睨みつけながら話していた。

まだ幼い少女からそんな強い言葉と視線をぶつけられて、メンバーは悲痛に顔を歪める。

「質問はそれで以上かしら？」

「ええ…もういいわ ありがとう」

先程の話のショックでシエルは何を聞こうとしていたのか忘れてしまっていた。

「そう。じゃ、私達は行くわ。さよなら」

セシリアが別れを告げようとした瞬間艦内が衝撃に揺れる。  
そしてその衝撃と共にけたたましいアラートが響き渡る。

「敵機接近！ 数は10です！」

## 『第4話』 ダリス隊

その日人々は絶望を払う翼を見る。

「レイ！ 状況を教えて！ M Sパイロットはコックピットで待機して！」  
船長のシエルは素早く指示を出す。

「艦の前方より革命軍！ あれは……ダリス隊ですっ！」

「こんな時に……！ M S隊発進！ 各員第一戦闘配置！ 敵はダリス隊よ！ 全員気  
を引き締めなさい！」

「はいっ！（おう！）」

宇宙革命軍ダリス隊隊長のダリスダッチは自軍のMSがアンノウンMSに撃破されたとの情報を得てその中域へと向かつていた。

「ホントにこんなどこにいんのか？ アンノウンのMSなんてよ」

そう疑いを持つ人物はノイン・エルダー。

フェンリル・ウォリアーのパイロットである。

「もうどつかいっちゃつたんじやないの？ どうせそのアンノウンってアイアスの連中でしょ？」

彼女はアンネ・ワルサー。

フェンリル・ガンナーのパイロットである。

「ああ、恐らくはアイアスの連中だな だからこそ俺らはあそこへ向かう」

そうダリスは言う。

「そうですね これ以上アイアスに俺達の邪魔はさせないようにしないと」

彼はギルバート・ヴァイス。

ギルバートは統制軍から【ガンダムデスペア】を奪取し、そのパイロットになつていた。

「前方にガラハッドを捕捉！」

「よし！ これより【バハムート】は戦闘へ移る！ 各員第一戦闘配置！ M S隊発進！  
油断はするなよ」

「どうする？ セシリリアちゃん…」

『セシルはどうしたいの？』

「私は……私は助けたいよ！ この艦の人達を！」

『はあ… ま、 そう言うつて事は分かつてたけどね…』

「行こう！ セシリリアちゃん！」

言つてセシルは格納庫の【ホープ】へ向かつて走つて行つた。

「システム起動 機体各部に損傷無し 全システムオールグリーン 行けるよ セシリ  
アちゃん」

『じゃあ変わるわね』

少女の首が力無く下がる。

そうして再び顔をあげた時少女の綺麗な赤い瞳は澄んだ蒼い瞳になつていた。

「艦長！ M S発進 デッキが勝手に・・！」

「・・ あの子達ね 回線を繋いで」

シエルはやれやれといわんばかりにレイに指示を出す。

「貴女達今ここで戦闘を開始したら貴女達はアイアスのメンバードと思われるけれど  
ど・・ いいのかしら？」

助けるわ』

「そう・・・ じゃあ頼むわね」

『私はアイアスを助ける』

シエルには、その言葉がとても力強く感じられた。

「セシリ亞！ ホープ行きます！」

アイアスの発進デツキから蒼白の希望が飛び出した。

## 『第5話』再会の姉弟

その日人々は絶望を祓う翼を見る

革命軍 side

バハムートの出撃ハツチへ紫色に輝くMSが搬入される。  
そのMSの名前は【<sup>絶望</sup>ガンダムデスペア】

「ギルバート・ヴァイス！ デスペア！ 行きます！」

その名の通り人々に絶望を与えるMSが今、発進した。

革命軍 side out

漆黒の宇宙で戦闘が繰り広げられる。

戦闘を行つてゐる軍は【アイアス】と【革命軍】。

赤いペルセウスがフエンリル・ウォリアーへと2本のペルセウス・ハルパーを振り下ろす。

しかしフエンリル・ウォリアーは1本のビームソードでいなす。

そしてフエンリル・ウォリアーが実体剣で横薙ぎに切り込み、ペルセウスがいなす。

戦闘が開始してからずつとこれが絶えず繰り広げられていた。

「チイツ！　さつさとアンノウンのMSを出して引っ込めや！　赤いMSうう！」

ループに痺れを切らしたのか、フエンリル・ウォリアーのパイロットであるノイン・エルダーが叫ぶ。

「……」

ペルセウスのパイロット　クリス・リヒトはそれを無視し淡々と攻撃を繰り返していく。

く。

暫く攻防が続きクリスはある不信感を感じる。

―― 反撃が来ない……？ ――

しかし気付いた時にはもう遅く、ガラハッドからかなり距離を離されていた。

——どうする……？

クリスが考えていると後ろからの攻撃を知らせるアラートが鳴り響く。

「なっ!?」

ギリギリの所で反応したクリスはペルセウス・ハルパーで敵の攻撃を受け止める。なんとか凌いだはいいものの、前方にはフエンリル・ウォリアー、後方にはガンダムデスペアが展開している。

「くつ……」

フエンリル・ウォリアーが斬り掛かる。

1本のペルセウス・ハルパーでなんとか受け切り、脚部のミサイルポッドを回転させ、斬りかかって来るデスペアへ向け、発射させる。

つもりだつた。

ドオオオン！

ペルセウスの脚部が爆散する。

「なっ!?」

デスペアはミサイルポッドの起動を察知し、武装をビームライフルへと変えていた。そして発射される前にビームライフルでミサイルポッドを撃ち抜いたのだ。

「はははっ！ これで足が吹き飛んだなあ！ 赤いMSうう！」

ノインが叫び、斬りかかつて来る。

ミサイルポッドの爆発に気を取られたクリスはフエンリルの攻撃への反応が遅れた。  
「間に合わない……！」ここまでか……

クリスが死を覚悟したその瞬間。

遠方から青白いビームが飛んできた。

フエンリルには当たらなかつたが、この戦場で青白いビームを出すMSは1機しか存在しなかつた。

「……ホープ」

「アンタ！ 動ける！ 動けるなら早く行きなさい！」

「……救援感謝する 退却する」

ペルセウスが離脱する。

フエンリルはペルセウスを逃がさんと追跡しようとする。

しかし、青白いビームが飛んでくる。

「……行かせるとでも？」

「チイツ！ 邪魔すんなよ！ お前ええ！」

フエンリルがビームソードを片手に持ち、片手を後ろへ回して突っ込んでくる。セシリアは右手のビームサーベルで受け止める。

この対応にノインは歪んだ笑顔を浮かべる。

一掛かつた！

ビームソードとビームサーベルが交差した瞬間後ろに回した手でハンドグレネードを投擲する。

ノインが勝ちを確信したその瞬間。

「ノインさん！ 下がつて!!」

コツクピットにギルバートの声が響く。

本来ならば反応出来ないタイミングであつたが脳が危機を察知したのか驚異的な反応速度でホープから距離をとる。

話した瞬間ホープの特殊兵装【ウイングス】がフエンリルのいた場所とグレネードを撃ち抜いた。

「それで避けたつもり？」

先程起動していたウイングスは4つ。

しかし、ホープの羽から外れているウイングスの数は・・・5つ。

「・・・ッ！」

ギルバートが気付いたがもう遅い。

ギルバートが伝える前に5つめのウイングスがフエンリルのメインカメラを撃ち抜

いた。

「なっ!? うわあ!!」

——このままじやノインさんがやられる……！

そう判断したギルバートがビームサイスを展開し、ホープへ切り込む。

しかしウイングスで行く手を遮られてしまう。

「くそつ!! ノインさん逃げて！」

ノインをなんとか逃がそうと叫ぶ。

しかしホープのビームサーベルがフェンリルのコツクピットへ振り下ろされる事は無かつた。

ホープが2本のビームサーベルを振り下ろし、フェンリルの腕が切り裂かれる。

「セシルがパイロットが乗っているMSを破壊するのは好きじやないの だからそこのフェンリルを連れて早く行きなさい」

その声を聞いた瞬間時が止まつたと錯覚した。

「セシル……？ それにその声……？ 姉……さん？」

【セシル】。

ギルバートは確かにそう聞こえた。

宇宙統制軍に殺されたはずの名前を、聞いた。

# 『第6話』 叫び

その日少年は、絶望を体感し、飲み込まれるー。

ギルバート side

「姉さん？」

俺は聞いたーいや、聞いてしまった。  
目の前の蒼いMSのパイロットの名を。

10年前に宇宙統制軍に殺され、失つたと思っていた…姉の名を。  
「なんなのよ…さつきから姉さん、姉さんつて…アンタ誰よ…セシルの知り合い  
？」

「…え？」

今…なんて言つた…？

「姉さん…？俺だよ ギルだ！ギルバートだよ！ 姉さん！」

「えーと…？ セシルの知り合いなの？」

姉さんはそう言つて暫く黙りこんでしまつた。

「なんで……なんでなんだよ……姉さん……」

「えつと……ごめんなさい 私……貴方の事を憶えていないの……本当にごめんなさいね？」

その答えを聞いた時……

「クソツ……！ なんでだ！ なんでなんだ！」

「なんで！ なんでなんでなんでなんでなんでなんで！ なんでおぼえてないんだ！ 僕だよ！ 僕だ！ ギルバートだ！ 姉さんの弟なんだよ！ やつと……やつと会えたのに！ どうして！ どうして憶えていてくれないんだ！」

俺は——そう叫んだ。

「弟って……やつと会えたって……どういう……？」

「俺と……俺と一緒に来てくれ！ 姉さん！ そうすれば……きつと……！」

「そろそろ黙ってくれないかしら？ ギルバート君」

「……は？」

「黙ってくれって言つてるのよギルバート君」

「姉さんは……何を？ 何を言つてるんだ……？」

「セシルは憶えてないって言つてるじゃない アンタ セシルの弟なんでしょ？ 本当かどうかは知らないけど」

——憶えてない？ 本当かどうかは知らない？ 本当に俺達は姉弟だ……

「だつたら思い出すまで待つなりなんなりしてくれても良いんじやないかしら？」

——何を……『コイツ』は何を……？——

「オマエは……何を……言つてるんだ……！」

——『コイツ』は姉さんじや無い……『コイツ』は……

「コイツは……オマエは……敵だああ！」

ギルバート side out

彼がそう叫んだ瞬間、紫色のMS——ガンダムデスペア——はスラスターを全開に蒸かし突っ込んできた。

「何よ！ 情緒不安定なの!? うわあ!?」

「姉さんを……！ 姉さんを返せえええ……！」

「だから姉さんって誰よ!? ちよつとは落ち着きなさいよ！ チイつ！ 行けえ！ ウィングス！」

セシリアがそう叫んだ時、ホープのバックパックに装着された12基のウイングスがバックパックから分離、射出された。